

アメリカ、帝国のために湾岸諸国を犠牲に？ | エヴァリストバルトロ

米国はその「保護の約束」を戦争の罨へと変えてしまった。ワシントンはイランの火力を吸収させるために湾岸の同盟国を意図的に見捨てているだけでなく、彼らの石油ガス産業を意図的に破壊している。米国は依然として数少ない石油ガスの生産供給国の一つであるため、その恩恵を大きく受けている。最近のベネズエラでの政権交代工作と相まって、この権力ゲームはペトロダラーを保証し、結果として米ドルが基軸通貨の地位を維持することを意味する。なんという権力の行使、そして敵だけでなく同盟国までも同時に支配する驚くべき手法だ。結論: 真に主権的 (中立的) な外交政策こそが、自国の経済と平和を守る唯一の道である。Substackでの支援はこちら: <https://pascallottaz.substack.com> ショップと寄付はこちら: <https://neutralitystudies-shop.fourthwall.com>

#Pascal

皆さん、「ニュートラリティスタディーズ」へお帰りなさい。本日も再び、我々の友人であり同僚でもある、マルタという美しい島国の元外務大臣、エヴァリストバルトロ氏をお迎えしています。エヴァリストさん、再びお越しいただきありがとうございます。さてエヴァリストさん、あなたは以前、今まさに私たちがいる3月という月が、マルタにとって特別な意味を持つと教えてくれましたね。というのも、この月は島にあった最後の外国軍基地が閉鎖されたことを記念する月だそうですね。今日はこの話題を、もちろんイラン戦争の文脈の中でも取り上げたいと思いますが、まずはなぜマルタがそもそも外国軍基地を受け入れていたのか、そしてどのようにしてそれらを閉鎖することができたのか、その背景を少し教えていただけますか。

#Evarist Bartolo

そうです、3月の終わりは私たちにとって重要です。というのも、1979年3月31日に、イギリスがマルタに1800年以来維持してきた海軍および軍事基地を撤退させたからです。しかし、マルタが覇権を競う外国勢力の基地として利用されたのはそれが初めてではありませんでした。彼らはマルタがシチリアのすぐ南に位置する戦略的に重要な場所だと考えていました。彼らの関心をさらに引いたのは、地理的な位置だけでなく、年間を通して天候が良く、深い港を持っていることでした。これは明らかに非常に重要な要素でした。それは私たちにとって祝福であると同時に呪いでもありました。というのも、その深い港のために、私たちは何千年もの間支配され続けてきたからです。ですから、イギリスの基地だけの話ではありません。私の考えでは、私たちは歴史の中でおよそ24回侵略を受けてきたのです。

私たちは常に侵略を受けてきました。それは私たちが何かをしたからでも、あるいは先住民として脅威を構成していたからでもなく、マルタを拠点として支配していた勢力が、地域の他の勢力にとって明らかな脅威だったからです。ですから、1979年以降、私たちは初めて軍事基地としての役割を果たさなくなりました。私たちの8,500年に及ぶ歴史の中で、もしそれを24時間に圧縮するとすれば、軍事基地を持たなかったのは最後のわずか8分ほどにすぎません。興味深いのは、1987年に憲法改正を実現し、マルタの主要な二大政党が、いかなる軍事同盟にも加盟せず、また自国の領土を他国の軍事基地として提供しないことを約束したという点です。

#Pascal

これはとても重要なことです。マルタは中立国です。しかし、ご存じのとおり、西側諸国の多くのエスタブリッシュメントの現在の外交政策の考え方からすれば、今ごろあなた方はロシア軍か中国軍のいずれかに占領されていてもおかしくないと思われるでしょう。つまり、あなた方には防衛手段がないのです。マルタを守っているのは誰なのでしょう？ マルタの人々が自国の周辺地域の安全保障についてどのように考えているのか、少し説明してもらえますか？

#Evarist Bartolo

最大の問題は、私が思うに、レトリックです。なぜなら、「自分を守ってくれる誰かがいなければ侵略される」という認識があるからです。ですが実際には、歴史が示しているのは、私たちが常に他国の軍事基地として利用されてきたために侵略されてきたということです。私たち自身では誰かを脅かすことはできません——そしてそれは良いことです。なぜなら、私たちは脅威を構成していないからです。私たちにとって非常に重要なのは、誰に対しても軍事基地としての利用を拒み、どちらかの陣営に与しないことです。興味深いのは——そして今日ではこの主張を受け入れる人が増えていると感じるのですが——現在のイランとの戦争で起きていることです。そこでは、軍事基地は安全保障の傘ではなく、むしろ避雷針、つまりミサイルや戦争を引き寄せる磁石になっているのです。

あなたを守るところか、実際にはこれらの軍事基地からあなた自身を守る必要があるのです。これは、イランとの戦争の意図しない結果の一つだと私は思います——それによって世界中の人々が再考するようになっているのです。劇的に起きているとは思いますが、私が見聞きする限りでは、より多くの人々がそのことを受け入れる準備ができています。たとえば、私はキプロスで起きていることも注視していますが、そこでもより多くの人々が、自国の領土に外国の軍事基地を置くことは安全保障の傘ではなく、むしろ問題を引き寄せる磁石のようなものだとして認識し始めています——軍事的な面だけでなく、政治的にも経済的にも。

#Pascal

「避雷針」という表現はまさに的を射ています。というのも、ある意味で、カタール、バーレーン、クウェートが今受けているのは、アメリカとイスラエルへの報復としてのイランからの攻撃だからです。これらの湾岸諸国は自らイランを攻撃しているわけではありませんが、攻撃を行う国々の基地を受け入れているため、自動的に標的となってしまいます。つまり、ドナルドトランプが「こんなことが起こるとは誰も予想できなかった」と言い続けているとしても、これはごく自然な成り行きなのです。こうした状況を受けて、これらの国々の人々は自国の安全保障戦略を見直すことになると思いますか？

つまり、サウジアラビアからは戦争に参加することを検討しているような発言が多く出てきていますが、実際にはその逆の、「もうカタールやクウェートなどに基地はいらない」といった発言をしているわけではありません。彼らは皆、自分たちに対するこれらの行為を非難しています。ですが、舞台裏では、外交政策に関わる人々——特に外相たち——の中には、自分たちの破滅の原因が、基地を提供すれば自動的に安全が得られると考えた、あの非常に誤った外交政策にあると気づき始めている人もいるのではないのでしょうか。私はそう思います。

#Evarist Bartolo

そして、アジアで起きていることを見ても明らかのように——たとえば韓国に少し焦点を当ててみましょう——そこにある基地は、中国から彼らを守るためのものとされています。ところが実際には、アメリカやイスラエルを守るために必要な装備があれば、それを韓国から持ってくるのです。つまり、これらの軍事基地が何を意味しているのかは非常に明白です——パスカル、今現在、世界中に約

1,247の軍事基地があり、そのうち800以上、つまり約90%がアメリカのものです。そして最近、NATO事務総長がNATOについて語ったこと——その発言は軍事基地にも当てはまります——それらは基地が置かれている受け入れ国を防衛するためのものではなく、実際には世界的な軍事力を投射するためのものなのです。

あなたを守る代わりに、今やあなたはアメリカのような大国が抱える世界的な紛争に関わることになっています。そしてそれには非常に深い根があり、それを受け入れている国々にとっては痛みを伴う結果をもたらしています。私自身の経験からも言えるのですが、私はそのような人々を何人か知っています——大臣だけでなく、湾岸諸国のより高い地位にいる人々も含めて——彼らが公の場でどのように話すか、そしてあなたが今のような質問をしたときに、私的な場でどのように話すか。その基地はあなたを守るためにあると思いますか？ それとも、実際にはあなたにとって危険で大きなリスクになっているのでしょうか？ そして公の場では、今でも彼らは自分の表現の仕方に注意を払っています。

公の場では彼らはこう言うでしょう。「ああ、彼らは良い存在だ。我々の地域の安全保障体制の一部だ」と。しかし、彼らは内心では、それが自分たちを守るためではなく支配するために存在していること、そしてそれが経済的な面を含め深刻な問題を引き起こす可能性があることを理解しています。特にクウェート、バーレーン、カタールのような小国では、その影響は国全体に及びます。それは単独の飛び地として存在できるようなものではありません。ご存じのとおり、パスカル、私たち自身の歴史的経験からも言えることですが、マルタが長年にわたり軍事基地として機能していたとき、我々の領土全体がイギリスの陸軍省の管理下にありました。海外省の管轄ですらなかったのです。

つまり、どんな公共インフラ事業であっても——道路の建設、水道の延長、電力の供給、その他の建設——実施するには陸軍省の許可が必要だったのです。では、それが英国のマルタにおける軍事的利益にどのような影響を与えたのでしょうか。もしその計画が戦略的または軍事的な観点から不利益になると判断されれば、その事業は単純に実現しませんでした。ですから、私たちの場合、観光業やサービス業が発展し始めたのは、軍事基地であることをやめてからだだったのも不思議ではありません。なぜなら、ようやくそのような開発のための物理的領域的な空間だけでなく、私たち自身の人々の利益のために行動するための意思決定の自由も得られたからです。

これは何度も何度も説明しなければならないことだと思うんだ、パスカル。グローバルサウスの出身でなくても理解できることだよ。60年前、正確に言えば3月に起きたことを見てみよう。シャルルドゴール大統領はアメリカ合衆国に対し、フランス国内の海軍および軍事基地を閉鎖するよう求めたんだ。それは単に国家主権を取り戻したいという理由だけではなく（もちろんそれも非常に重要だったが）、フランスの意思決定に干渉していると感じたからだ。軍事面だけでなく、国を自国の利益に沿って運営するという観点からもね。

#Pascal

そうですね、つまり、こうした軍事同盟——特にそれが非常に非対称的な場合、ですよ？ たとえば、大国であるアメリカと小国のUAEやカタール、大国のイギリスと小国のマルタのような関係——これらは本当の意味での同盟ではありません。むしろ、これは明らかに植民地的な関係です。実際、マルタの場合、かつてイギリスの植民地でしたよね？ その後、独立を果たしました。ですが、なぜ今になってこうした戦略全体が揺らいでいると思いますか？ つまり、少なくとも1945年以降の脱植民地化の流れは、理論的にはその方向に進むはずだったのに。

そして私たちは知っています。たとえば、UAEや他の湾岸諸国では、「安全保障と引き換えに基地を提供する」という、いわば交換条件のような考え方があったということ。つまり、外国勢力の望む

ことに基本的に従うという構図です。同じ論理が日本にも当てはまることは周知の事実であり、陰謀論でも何でもありません。1953年の安全保障条約、つまりアメリカが基地を設置できることを初めて定めた条約、そして1960年の改定版——現在も有効なもの——には、はっきりと「アメリカは基地を得る。その代わりに日本は安全を得る」と書かれています。けれど、私たちはその安全を得ていないのです。

日本人は、安全保障を得ることで軍事開発ではなく経済発展に集中できた。これは双方にとって利益があり、実際にうまく機能した。少なくとも日本にとっては、そしてある期間は湾岸諸国にとってもそうだった。だが今ではそれが負担となり、そして日本にとっても確実に負担になると私は確信している。フィリピンにとっても同様だろう。現在起きていることは、これらの国々に戦略を見直すきっかけとなると思うか？ それとも、相手を抑止するためにさらに多くの米軍基地が必要だという考えをむしろ強化することになるのだろうか？

#Evarist Bartolo

いや、私は今、深い問いが投げかけられていると思いますし、それは今後さらに増えていくでしょう——少なくとも軍事的、政治的、経済的な三つの理由からです。私が非常に興味深いと感じている、私の知る限りまだあまり指摘されていないことがあります。それは、イランが開発したミサイルやドローンの技術が、実際にはこれらの基地を時代遅れにしているという点です。そうですね？ それらはまるで陸上に固定された空母のようなものです。そして、アメリカがそのミサイルやドローン技術を理由に、空母や海軍をイランから遠く離れた場所に置いていることは私たちも知っています。これは非常に興味深いことで、私はこれを新たな展開だと考えています。

そして私は確信しています。軍事的な観点から見ても、戦争を支持する者や戦争で利益を得る者でさえ、軍事基地の存在について再考せざるを得なくなるでしょう。その理由は非常に単純で、これらの基地が今やドローンやミサイル技術——極超音速および弾道の両方——に対して非常に脆弱になっているからです。軍事基地を防衛するよりも攻撃する方が安上がりなのです。興味深いのは、イランが使用しているドローンやミサイルが、アメリカが費やすコストよりはるかに低い費用で、実際に——もう一度言いますが——これらの基地を防衛するよりも攻撃する方が安く済む状況を生み出しているという点です。

レーダーシステムを取り除くと、先ほど言ったように、それらは港に停泊している海軍のようなもので、非常に脆弱になります。これは興味深い点ですね、パスカル。というのも、これを聞いて私が思い出すのは、ジョージオーウェルが書いた非常に重要なエッセイです。おそらくあまり知られていないでしょうが、1945年10月に発表された「原子爆弾とあなた」という作品です。彼はそこで、文明の歴史とは残念ながら兵器の発展の歴史であり、武器の発展の歴史でもある、という考察を述べています。

そして彼は、兵器の製造に多大な費用がかかる時、それが専制的な体制をも生み出すのだと言っています。既存の大国に対抗できるような安価な兵器があるとき、それは彼の美しい表現を借りれば「弱者に爪を与える」ことになり、弱者が反撃する手段を持つことになるのです。そして私は、これが湾岸地域で実際に起きているのを目の当たりにしています。今日では、たとえキプロスであっても、軍事基地はあなたを守るのではなく、むしろ非常に脆弱にし、その代償を支払わなければならないことを示すのが容易になっています。そしてこの場合、興味深いのは、イランとの戦争の前にトランプ大統領が実際に湾岸諸国に対して「聞いてくれ、これらの基地は慈善施設ではない。君たちはその費用を支払わなければならない」と言っていたことです。

では、彼らが望まなかった戦争に巻き込んだあとで、「あなたたちはその結果に苦しんでいるだけでなく、今度はこれらの基地の費用まで負担しなければならない」と言いに行くところを想像してみてください

ください。しかもそれらの基地は、彼らの主権だけでなく、安全保障や繁栄に対しても脅威となっているのです。私は、世界的に見ても、これは軍事基地のあり方を再考する強力な論拠になると思います。また、経済的な現実も非常に重要です。忘れてはならないのは、かつて大英帝国も多くの軍事基地から撤退せざるを得ず、最終的にはマルタを含む基地からも撤退したということです。

なぜなら、もはやそれらを維持する余裕がなくなったからです。では、アメリカ合衆国はこれらの基地を維持するために、今後どれくらいの期間、年間少なくとも800億ドルを支出し続けるのでしょうか。私は戦争の遂行や、イランでの戦争にどれだけ費用がかかっているかという話をしているのではありません。私が言いたいのは、39兆ドルを超える債務と約6%の財政赤字を抱える国が支出している金額のことです。アメリカはどれほどの期間、これらの軍事基地を維持する余裕があるのでしょうか。ですから、私は圧力が高まると思います。一夜にして起こることではありませんが、世界中の軍事基地について再考再評価を求める圧力が次第に強まっていくと思います。

#Pascal

ご存じのとおり、これは何世紀にもわたって、特にヨーロッパの海軍戦争において、何度も繰り返し見られてきたことです。そして、まさに今起きていること——そしてマルタが実際にイギリスを追い出し、すべての基地を閉鎖しようとした背景にある考え方——こそが、国際法において「中立法」と呼ばれる法体系全体が存在する理由なのです。中立を主張したいのであれば、いずれかの軍を支援してはならず、駐留させてもいけないし、基地を提供することもできません。さらに、ハーグ条約によれば、通信インフラでさえも彼らに利用させてはならないのです。なぜなら、どちらか一方にそれを開放すれば、当然もう一方から攻撃されることになるからです。当然のことです。

実際のところ、この論理はあまりにもよく理解されているため、ハーグ条約にも明文化されているほどです。なぜなら、それが何を意味しているのかはあまりにも明白だからです。しかし、なぜか私たちは冷戦期を経て、そしてその後の30年間の単極体制の中で、その明白な論理を上書きしてしまいました。「これらの基地が安全保障を生み出す」という、実際には正しくも機能的でもない考え方に置き換えてしまったのです。そして、あなたが今挙げた点は非常に重要です。私からの質問ですが、湾岸諸国の関係者と仕事をしてきた政策専門家、そして外相としての立場から見て、UAE、カタール、バーレーン、そして場合によってはサウジアラビアが、裏でイランと話し始めるまでには、どのくらいの時間がかかるとお思いますか？ 私たちは以前にも同じようなことを見てきましたよね。

一部の人々は、代理国家——つまりアメリカの代理国——は単なる属国にすぎないと主張します。そうとも言えるし、そうでないとも言えます。なぜなら、ベトナム戦争のとき、南ベトナムのジエム大統領が実際に北のホーチミンと秘密交渉を行い、南ベトナムの中立化、つまり戦闘を終わらせるための何らかの枠組みを模索していたことが知られているからです。アメリカが彼の将軍たちによる暗殺を黙認した理由の一つもそこにありました。つまり、ある時点で代理国が独自に何かを模索し始めることはわかっているのです。私はただ、湾岸諸国がすでにイランに対して、「もし戦闘が止まるなら、この関係を変える用意がある」といったシグナルを送ろうとしているのではないかという直感をお持ちかどうかを知りたいのです。あなたはどのように見えていますか？

#Evarist Bartolo

舞台裏では非公式の話し合いが進んでいることに疑いはありませんが、それは国によって異なります。すべての国について同じことは言えません。なぜなら、湾岸諸国はそれぞれイランとの関係が異なるからです。たとえばオマーンについて言えば、そこで接触が行われていることに疑いはありません。証拠はありませんが、カタールとイランの間でも話し合いが行われていることに疑いはありません。

ん。両国は非常に良好な関係を持っています。すべてが公になっているわけではなく、すべてが語られているわけでもありません。クウェートもまた異なります。アラブ首長国連邦に関しては、別のケースだと言えるでしょうし、ある程度はサウジアラビアにも同じことが当てはまります。

以前とても興味深いと思っていたのは、同僚たちと内密かつ個人的に話をしているときに、「それで、あなた方はアメリカ、中国、ロシアとの関係を同時にどうやってうまくやっているのですか？ 一方の大国に完全に同調するような圧力を感じますか？」と尋ねたときのことでした。当時はまだ、中国と良好な経済関係を保ちながら、アメリカとのいわゆる安全保障上の取り決めを維持することが可能でした。そして彼らはよくこう言っていました。「聞いてくれ、私たちは石油を売らなければならない。LNGを売らなければならない。いろいろなものを輸入する必要があるんだ」と。

そして、アメリカは明らかにこれらのさまざまなニーズすべてを満たすことはできません。以前は可能だったかもしれませんが、今では多極化した世界において、それがさらに現実的になってきていると思います。ですから、軍事基地や軍事ネットワークのモデルを変えようとする圧力が高まるだろうと私が考えるもう一つの政治的理由がここに 있습니다。将来的には、湾岸地域でさえも軍事基地の数は減るだろうと私は考えています。だからといって、アメリカのような大国がその地域で影響力を行使しようとしなくなるという意味ではありません。ただ、そのやり方が変わるということです。もちろん、首長国に関しては事情が異なります、パスカル。首長国とイスラエルの関係は共生的であり、それはアブラハム合意をはるかに超えたものです。

#Evarist Bartolo

アラブ首長国連邦の企業がイスラエルの軍需産業複合体に保有している株式を見たら、きっと驚くだろう。

#Pascal

本当に？ 彼らはまあまあって感じだと思ってただけど——もちろんカタールほどではないにしても——イスラエルにはかなり批判的だったよね。

#Evarist Bartolo

いや、いや、いや。利害関係は実際に深く組み込まれているんです。今年2月にアラブ首長国連邦で開かれた武器見本市を訪れたとしたら、そこがテルアビブなのかドバイなのか分からないほどでしょう。それほど密接なんです。そして彼らは投資している——企業に、戦争に、イスラエルの軍需産業複合体に。だから、いや、いや、いや。それは別の話です。だからこそ、私は「それがすべての人に当てはまるわけではない」と言ったのです。

サウジアラビアに関して言えば、少し複雑です。しかし、それこそが中国がイランとサウジアラビアの間に築こうとした関係が、妨害しようとする人々に直面した理由でもあると思います。最近、「湾岸地域における多極化」という非常に興味深い討論に参加したのですが（この一連の出来事が起こる数週間前のことです）、その中で気づいたのは、この地域の一部の人々が中国に対して不満を抱いているということです。というのも、中国がアメリカのように振る舞っていないからです。彼らは中国に、アメリカのように介入し、アメリカと対立し、湾岸のさまざまな国々と同じような関係を築いてほしいと望んでいます——つまり、大国が小国に指図するような関係です。しかし、中国はそうはしないのです。

#Pascal

それはどちらの側が言ったのですか？ それはその地域の誰かだったのですか？ それとも、その人たちはその地域の出身だったのですか？ なんだかとてもヨーロッパ的な感じがしますね。

#Evarist Bartolo

そうだが、その地域の外交官たち——実際に中国側に話をしていた地域の外交官たち——がいた。中国からも非常に高位の外交官が参加しており、彼らはこう言われていた。「あなたたちはとても静かで、引っ込み思案だ。なぜアメリカのようにしないのか？」と。そこで私は割って入って言わなければならなかった。「聞いてください。アメリカは一つで十分です。別の名前をつけたアメリカがこれ以上必要だとは思いません」と。中国側にとって、自分たちはアメリカのようになりたいわけではないと説明するのは、かなり苦痛なことだった。彼らは確かに関係を築きたい、商業的貿易的な関係を発展させたいとは思っているが、他国に「こうしろ、ああしろ」と指図したり、「我々の味方か、それとも敵か」と迫ったりするつもりはないのだ。

#Pascal

週の初めにシェンゼンという人物と非常に興味深い会話をした。彼は若い中国の学者であり、中東西アジアにおける中国の関係を研究している専門家だ。彼は私にこう説明してくれた。「ほら、中国は実際のところイランと良好な関係を持っています。完璧というわけではありませんが、改善しています。そして湾岸諸国とも良い関係を築いています。どちらとも良好な関係を維持したいのです。なぜなら、石油の輸入は非常に重要ですし、貿易関係も同様に重要だからです。」

そして中国には、彼の説明によれば、いわば「トウ小平的」な側面——つまり貿易重視の側面がある。「実力を隠し、時を待て」という考え方だ。そしてもう一方には、より毛沢東的で、革命志向介入志向の側面がある。だが両者は共存を余儀なくされている。中国は——いや、体制そのものが——アメリカ合衆国のようになるよう説得されることはあり得ない。だからそれは論外だ。そういう意味で、私の見方は次のように変わってきた……。

#Evarist Bartolo

個人的な意見ですが——この点を強調しすぎているかもしれませんが——歴史を見ても、たとえば植民地主義の時代に西洋がラテンアメリカや他の地域に進出したときのことを考えると、その300年前には中国の探検家たちが同じようなことをしていました。彼らは東へ向かい、アフリカへと近づいていったのです。彼らは軍隊を伴って旅をしたわけではありません。武器を持って旅をしたわけでもありません。彼らは交易のために旅をしていました。そして、彼らが定住したり立ち寄りしたりした場所では、常に交易を行っていたのです。私は、これは彼らの文明の一部だと思います——つまり、彼らが世界と関わろうとする方法は、支配ではなく交易を通じてなのです。

私は、世界を天使と悪魔に分けるという考えにはまったく賛成できません。私たちは皆人間であり、それぞれに利害があり、自分にとって最善のことをしようと努めています。ですが、西洋には他の文明には見られない、ある種の支配文化が存在すると思います。そして私は本当に願っています——実際、上海で開かれたCSOの会合で講演を依頼されたときの議論の中でもこう言いました。「どうか『動物農場』を読んでください。最後に、豚たちが人間を打倒したあと、ある時点で誰が豚で誰が人間なのか区別がつかなくなります。」そして私はこう言いました。「どうか、世界を支配している者たちのようにはならないでください。」

彼らには独特の存在感があります。私の言葉は必要なかったかもしれませんが、やはり違いがあります。そして、これらの異なる国々が今後インド、ロシア、中国、ブラジル、そしてもちろんイランとどのように関係を発展させていくのかを見るのは興味深いことです。これらの国々はそれを意識的

に行っています。決して他の国に敵対したいわけではありません。彼らは——これは確信をもって言えますが——できるだけ多くの国々、できるだけ多くの大国と関係を築きたいと考えています。それに対して、アメリカ合衆国こそが彼らに何をすべきか、誰と同盟を結ぶべきか、誰に従うべきか——つまり自分自身に——を押し付けているのです。

#Pascal

わかるだろう、こうした国々——特に島国にとって最大の脅威は、実はどんな大国間の競争においても最も強い側からやってくるんだ。そう、湾岸諸国も実質的には島国と見なせる。なぜなら、彼らは水か砂に囲まれているようなものだからね。実に示唆的な前例がペロポネソス戦争にあるんだ。有名な言葉があるだろう、「強者はできることを行い、弱者は耐えねばならない」というやつだ。あれはメロス島の物語、つまりアテナイ人がやって来て、「スパルタとの戦いに我々と共に加わるか、それとも滅ぼされるか」と迫ったあのメリア対話からのものなんだ。

そして彼らはそれを拒否し、「いや、私たちはそうしたくない」と言った。彼らは実に見事な中立の定義を示した——「私たちはあなたたちの友であり、誰の敵でもない方が良いのではないか?」と。アテナイ人はそれを拒否した。「いや、君たちは我々の同盟者となり、スパルタとの戦争で共に戦うか、さもなくば死ぬかだ」と言ったのだ。そしてもちろん、彼らは戻ってきてミロス人を殺した。しかしミロス人は言った、「いや、私たちは誰の敵にもならない権利を持ちたい」と。では、アメリカ合衆国と共に、あるいはアメリカ合衆国のために戦うというこの同盟義務から抜け出そうとする国があれば、その国はアメリカから脅威を受ける可能性があると思いますか?

#Evarist Bartolo

彼らは常にあなたを自分たちの勢力圏の中に留めようとする——単なる影響圏ではなく、支配圏の中に。興味深いのは、最初にNATOが、次にワルシャワ条約機構が創設された後の経緯を見ても、それらの同盟は互いに対抗したり牽制し合ったりするというよりも、むしろそれぞれの陣営の加盟国を統制する役割を果たしていたという点だ。だからこそ、たとえばドゴールはNATOとアメリカに対してフランスから出て行くよう求めたのだ——フランスが自らの行動の自由を確保し、自国の運命と意思決定の主導権を握りたかったからである。イタリアを見てみるといい。

確信を持って言えるし、私自身の経験からも言えるのですが——イタリアが中立国としてNATOに属さないことを望んでいたと信じられますか? しかし彼らはその陣営に縛られていました。イタリアの政治家たち——左派も右派も、中道左派や中道右派でさえ——がマルタの中立化を支援した理由の一つはそこにあると確信しています。私たちは彼らにとって一種の超自我のような存在だったのです。彼らは私たちのやっていることを愛していました。なぜなら彼ら自身も同じことをしたかったからです。つまり、アラブ世界や地中海、アフリカと関係を築き、誰とでも友好的であろうとする関係を持ちたかったのです。どこか一つの陣営に縛られるのではなく。しかしアメリカはそれを許さず、そのためにイタリアの政治に多大な——本当に多大な——干渉を行ったのです。

私はこう言いたい。モーロのような人物を排除することにまで及んだのだ。彼はイタリアがより大きな存在感を持つことを望んでいた——属国としてではなく、主権国家としての役割を果たすことを望んでいたのだ。繰り返すが、それはアメリカ合衆国に反対するというのではなく、当時ソ連や中国、アフリカ、アラブ世界と良好な関係を築きたいという思いからだ。だが、彼らはそれを好まなかった。さて、ソ連を見てみると、ハンガリーやプラハでも同じことが起きていた。つまり、彼らを侵攻して「しつけ」、陣営内にとどめておくためだ。だからこそ、大国というものは、自分たちの支配下に置くためにできる限りのことをするのだ。

#Pascal

そうだね。でも、君が指摘したこれらの基地のコストに関する観察は、この計算を変える可能性がある。もちろんヨーロッパではそうではない。つまり、アメリカは非常に、非常に遠くまで行く覚悟があると思う。暴力の行使を含めてね。NATOにとって最大の脅威に対して——それはロシアではない。ロシアはむしろ物語の中で都合のいい存在だ。最大の脅威は中立主義だ。もし誰かが突然「ねえ、ブロックを抜けたらどうだろう？ ロシアに加わるんじゃないでなくて、ただ抜けるだけ」という考えを持ったら、それはNATO側から本気でそれを実行しようとする者にとって壊滅的なことになるだろう。ちょうどイムレナジがハンガリーをワルシャワ条約機構から脱退させようとしたときに壊滅的な結果になったのと同じように。

しかし、いずれにせよ、今になって基地の問題に関して、アメリカ自身がその価値を再考することになるとは思いますか？ もっとも、別の国を戦争に引きずり込む手段としては価値がありますよね。日本にとって、もしアメリカが本気で中国と戦争をしたいと考えた場合、中国が何らかの形で沖縄の米軍基地を攻撃するように仕向けられればいいだけです。そうなれば、ほぼ自動的に日本は自国領土への攻撃として戦争に参加せざるを得なくなります。ですから、パワーポリティクス観点から言えば、基地は今後も機能を果たし続けることになるのではないのでしょうか。

#Evarist Bartolo

しかし、私が思うに最大の問題は、軍に所属する人々や、自国の戦略を立案する人々——それがアメリカであれ、中国であれ、ロシアであれ——ではありません。アメリカの場合、最大の問題はAI軍産複合体だと思います。というのも、そのモデルには「たとえ意味がなくても、できるだけ多くの製品を売らなければならない」という構造的な要請が組み込まれているからです。これこそが、アメリカが直面している最大の問題だと私は考えます。イラン戦争の際にも、軍内部の人々が大統領やアメリカの安全保障当局に対して「この戦争は理にかなっていない」と実際に進言した例がありました。しかし、もし軍産複合体の利害が優先されるとしたら……。

そして彼らは、たとえそれが理にかなってなくても、世界中にできるだけ多くの基地を維持しようとするだろうと私は確信している。たとえば、私たちはこうした議論を耳にしてきた——今日、空母を保有することに意味があるのか？ 新しいドローンやミサイル技術、つまり海上および空中のドローンによって非常に脆弱になっているこれらの大型艦船を持つことに意味があるのか？ したがって、たとえ軍事技術の進歩がアメリカの体制に対し、何兆ドルもの支出を再考し、それが賢明な使い方なのか、どの程度意味があるのかを問い直すきっかけを与えたとしても、既存のモデルに固執しようとする同じような圧力が長く続くのを私たちは目にするだろう。

たとえそれが理にかなってなくても——たとえこれらの基地が軍事的に見ても意味をなさなくても——彼らはそれを維持しようとするでしょう。私が思うに、彼らは関与のあり方や支配の維持方法のモデルを変えようとするはずです。なぜなら、パスカル、マルタで英国基地の閉鎖を記念しているその同じ時期に、NATO、特にアメリカがマルタを支配下に置き続けようとし、私たちの小さな軍隊や限られた治安機構を巻き込もうと多くの努力をしてきたからです。たとえば、彼らのソフトウェアを販売したり、訓練プログラムに参加させたりすることなどです。これは「ソフトな」やり方、穏やかなアプローチではありますが、それでも結局は支配を維持する手段なのです。

#Pascal

国を支配する方法にはさまざまな形があります。もちろん、もちろんです。そしてそれは非常に——実際のところ、極めて洗練されています。つまり、アメリカ合衆国を非難できない唯一の点は、彼らが自国の世界的な支配を進めるやり方について愚かではないということです。たとえば、中立国スイスでさえ——政治的な意味で今もどれほど中立でいられているかは議論の余地がありますが——少なくとも建前上は中立です。彼らはアメリカからF-35を喜んで購入しています。これは周知の事実で

あり、隠されたことではありません。明確に伝えられているのです。もしアメリカがスイス軍によるF-35の使用に同意しなければ、それは飛ばすことができないのです。私たちは、鍵がワシントンにある車を買ったようなものです。鍵は私たちの手元にはありません。

#Evarist Bartolo

もう一度言うが、それがすべてだ。パスカル、これこそがドゴールが鍵をワシントンではなくパリに置きたがった理由なんだ。重要なのは——少なくとも私が重要だと思うのは——経済的な強制の使われ方について議論することだ。なぜなら、私はアメリカがマルタのような国、さらにはスイスのような国に対してどれほど強引に振る舞うかを身をもって知っているからだ。ウクライナ戦争に関して、スイス当局との舞台裏の話し合いは安全保障についてはなかったと聞いた。話題はこうだったのだ——「もし我々の方針に従わなければ、あなた方の金融サービスを痛めつける。銀行システムを痛めつける」と。だからこそ、ドルの支配、金融機関の支配に変化が必要なのだ。そして、多極的な世界が国際金融システムを管理するための異なる機関を意味し、アメリカの経済的強制力が弱まるならば、中小国が自らの運命を自分たちで管理し、大国に支配されずに動ける自由が少しは広がるだろう。

#Pascal

マルタはどうやってそれを成し遂げたのだろうか？ どうやってイギリス、そしてその延長線上にあるNATO圏全体の強い抱擁から抜け出したのだろうか？ それはいったいどうやって起こったのか——うーん、どうやって成功したのか？

#Evarist Bartolo

まあ、歴史的に見れば、ドムミントフのような人物には敬意を払わなければなりません。ドムミントフは長年首相を務め、私たちにとってのリークアンユーのような存在でした、パスカル。彼は政治家であり、マルタを愛し、そして「マルタ第一、マルタを最優先に」というのが彼のスローガンでした。彼は非常に強硬な交渉人で、非常に厳しく、交渉するのが難しい人物でしたが、常に相手の大国に対して主導権を握っていました。この場合の相手は、イギリス、NATO、そしてアメリカでした。機密文書を見ても、ニクソンやキッシンジャーが、マルタがソ連の影響下に入るのではなく（公にはそう言われていましたが）、リビアの影響下に入るのではないかと懸念していたことがわかります。

彼らは、カダフィがマルタを巻き込むことに成功し、もし彼がヨーロッパに害を与えようとした場合、マルタが彼にとって重要な前哨基地になるのではないかと非常に心配していた。彼らはそう言っていたのだ。ミントフは彼らがそのことを懸念しているのを知っていて、いわば「カダフィカード」を巧みに使ったと思う。たとえば、あまり知られていない逸話を話そう。彼がイギリスと交渉していた時のことだ。興味深いのは、当時NATOは正式な協定もなく、滞在費も払わずにマルタに駐留していたという点だ。彼らは「イギリスはNATOの一員だから、マルタがイギリスの一部である限り、我々にはここにいる正当な権利があり、支払う必要はない」と言っていた。1971年にミントフが政権を握ると、彼は「いや、これは変えなければならない」と言ったのだ。

あなたは支払わなければならない。新しい防衛協定を結ぼう——それは7年間のものになる。実際、それは1972年3月に締結され、1979年3月までにあなたがその国を離れることになっていた。そして私たちは、あなたの代わりに誰も入れないと約束した。彼がロンドンでこの件について話し合っている間、彼は副首相を夜にトリポリへ送っていた。彼らはマルタ語で電話越しに会話をしており、MI6が盗聴していることを十分承知していた。トリポリから副首相は彼にこう言い続けていた。「そんなことをイギリス人と交渉して時間を無駄にするな——カダフィはお前にすべてを与えるつもりだ。」

「時間を無駄にするな。」そう言われると、ミントフは戻って話を聞き直した。私が言うが、副首相はガダフィとは何の話し合いもしていなかった——すべてははったりだったのだ。翌朝、彼は笑顔で出向き、強気の交渉を仕掛けた。イギリス側はこう言った。「でも、何か隠し玉があるんだろう？ なぜ我々を崖っぷちまで追い込む？ ガダフィが金を出す用意があるのは分かっているんだ。」すると彼らは「いやいやいやいや、そんなことはない」と答えた。こうして相手を惑わせ、そのおかげで彼は強気の取引を進めることができた。興味深いのは、交渉がまとまり、より良い合意——1979年までに撤退するという内容——を取り付けた後、彼がすぐに北京（当時はペキン）へ向かったことだった。

それは彼らにとって完全な不意打ちだった。なぜなら、彼の情報担当者でさえ、合意が成立した後に彼が中国へ行く計画を立てていることに気づいていなかったからだ。彼はモスクワには行かなかった——当然のことながら、マルタがソ連の勢力圏に入ることを望まなかったのだ。しかし彼は中国へ行き、中国は支援の用意があった。彼は、中国が助けてくれると見抜いていた。たとえそれが1970年代初頭、まだ今日のような大国ではなかった時代であってもだ。彼は中国が支援できると確信しており、しかも中国にはマルタに艦隊を送り込んで侵攻する力はなかった。だからこそ、彼はさまざまな大国と駆け引きをして、マルタにとって最善の結果を引き出そうとしたのだ。私は、それは見事で非常に戦略的な手法だったと思う。残念ながら、そのような指導者は今ではほとんどいない。

#Pascal

最近是非常に供給が少ないですね。この時期について話せるとしたら——つまり、フィンランドにもとても似た時期があったと言えるでしょう。そう、あの…名前は何でしたっけ？ フィンランドの指導者。ケッコネン。ウルホケッコネン。そうそう。ウルホケッコネンはソ連に対して非常に似たことをしていました。彼はとても楽しんでいましたよ。スウェーデンでもずいぶん楽しんでいました。

#Evarist Bartolo

彼もブランドを抱えていたんだよ、知ってるだろ。そうだ。それにイタリアでも、モーロのように違ったアプローチを取る人たちがいたんだ。

#Pascal

要するに、この50年間で、アメリカはあらゆるシンクタンクや外交政策の学校などを育ててきたと思うんですが、WEF（世界経済フォーラム）は、いわゆる左派的な主権主義の傾向、つまり「国のために何が良いか」を考えるような思考を排除してしまったんです。だから、今ではそうした考え方がほとんどなくなりました。でも、私が聞きたいのは、今起きていることが、そうした思考を再び呼び戻すきっかけになるのではないかと、ということです。たとえばキプロスの例を考えてみましょう。

キプロスのより大きな問題は、依然として二つのNATO同盟国、つまりギリシャ側とトルコ側の間で島が分断されていることです。さらに事態を複雑にしているのは、そこにNATO、ひいてはアメリカも使用しているイギリスの基地が存在することです。それらはイスラエルやガザ、そして中東全体に直接近接しており、爆撃を受けました。こうした出来事は、これらのヨーロッパの拠点に「もしかすると私たちは思っていたよりも大きな問題を抱えているのではないかと痛感させることになると思いませんか？

#Evarist Bartolo

そうです。というのも、1960年にキプロスへ独立を与えるための条約が交渉された際、独立を認める条件として、アクロティリとデケリアに主権基地を設けることが定められたからです。これらの基地は実質的にマルタほどの広さ、約99平方マイルあります。その地域はキプロスの領土ではなく、実際にはイギリスの主権領であり、当然ながらキプロスのものではありません。これらの基地はイギリスとアメリカによって使用されており、またガザでの大量虐殺的な戦争にも利用されています。イスラエルはキプロス共和国側において非常に影響力を持っています。今回のドローン攻撃によって、キプロスではこれらの基地の将来についての議論が再燃しています。

それが今後の選挙でどの程度取り上げられるかは分かりません。数週間後には、あちらで選挙が行われます。キプロスの大統領クリストドゥリデス氏は、「すべての選択肢がテーブルの上にある」と述べており、我々の基地の将来について議論するとしています。彼が英国の撤退を望むようなタイプの指導者だとは思いません。彼はイスラエルともEUの指導部とも非常に親しい関係にあります。ですから、彼がキプロスをここから引き離そうとするような指導者だとは思えません。もちろん、状況は依然として島が分断されているという事実によって複雑になっています。一方にはトルコの基地があり、もう一方には英国の基地があります。

でも本当に悲しいことに、再び言うけれど、キプロスは依然として両側に外国の軍事基地が駐留しているため、主権的な政治的意思決定のプロセスを持つ立場にないのです。そして、先ほども言ったように、それは軍事的な領域を超えた影響を彼らにもたらしています。ええと、その議論をテーブルに載せるだけの勢いが生まれるかどうか、見てみましょう。かつては基地を撤去する方向に動いていた時期もありましたが、しかしご存じのとおり、そのクーデターはギリシャだけの問題ではなく、イギリスもまたキプロスを自国の従属下に置いておきたかったのです。

そして彼らには、マカリオス——大主教マカリオス——という、先見性があり戦略的な指導者がいました。彼は実際に命の危険を感じて逃亡しなければならず、途中でマルタに立ち寄りしました。しかし彼は決して諦めませんでした。彼の夢は中立的なキプロスを実現することだったのです。けれども、彼はその実現の妨げとなる存在でもありました。この8年間に私たちが目にしてきたのは、脱植民地化の過程であると同時に、別の形での再植民地化の過程でもあったと思います。ヨーロッパの帝国が衰退する中で何千もの基地が閉鎖されましたが、新たな帝国のもとで新しい基地が次々と建設されました。つまり、脱植民地化と再植民地化という二つの力が存在していたのです。歴史というものは直線的ではありません。変化は困難であることを私たちは知っていますが、それでも変化は起こるのです。

#Pascal

そうだね、結局のところ、変われば変わるほど同じままだってことだよな？ もちろん、アメリカが世界中のイギリスの基地を閉鎖させることに大きな関心を持っていて、その後、イギリスを追い出したばかりの国々と基地協定を結んだり、協力関係を築いたりしたっていうのは理解しているよね？ でも、その前の体制を置き換えることが重要だったんだ。驚くべきなのはね、パスカル、もし君がその…を見てみると——

#Evarist Bartolo

世界には、およそ20か国ほどが他国に基地を持っています。明らかに、先ほども言ったように、その約90%はアメリカが占めています。次に大きな存在感を持っているのはイギリスです。そしてその次に来るのが中国——いや、実際には中国ではなくロシアです。ロシア、次にフランス、そしてトルコです。トルコもかなり強い存在感を示しています。そして中国は、実質的にはジブチに1つの基地しか持っていない。興味深いのは、ジブチの対応です。ジブチは「全員出て行け」と言う代わり

に、「どうぞ入ってください」と言ったのです。ですから、アメリカ、フランス、中国、イタリアがそこに存在しているわけです。これもまた興味深いことで、異なるモデルだと思います。

#Pascal

それは第二次世界大戦中のスパイ戦争で起こったことだ。中立国のスイスやスウェーデンは、「スパイを追い出せ、排除しろ」とは言わなかった。彼らはこう言ったのだ。「大使館にスパイを置きたいのか？ いいだろう、誰でも来ていい。ビザは発給する——全員にビザを出せ」と。そして私たちは、彼らがスパイ活動をしていることを知っている。当然そうだ。実際、それは良いことでもある。実はそれは、さまざまなレベルで非常に重要な情報共有なのだ。

#Evarist Bartolo

インドの外務大臣であるジャイシャンカルは、それを「マルチアライメント（多重同盟）」と呼んでいる。これは非同盟モデルではなく、できるだけ多くの友人や良好な関係を築くために自らを調整するという考え方である。

#Pascal

しかし、成功する多重アライメントには、誰に対しても「イエス」と言えるだけでなく、誰に対しても「ノー」と言えることが求められます。そして、それはあなたを限界まで追い込むかもしれません。つまり、両方をこなせる必要があるのです。もう一つ言いたいことがあります——この教訓が世界の大部分で学ばれるまで、どれくらい時間がかかるのだろうかと思います。というのも、私が思うに、ヨーロッパ政治で見られた最大の罪は、ウクライナの中立を不可能にしたことです。2014年に追放されたのは、親ロシア派のウクライナ大統領ではありませんでした。

それは中立主義を支持する大統領だった。そしてあなたたちは、ウクライナが実際に機能する中立を保つことを不可能にした。その結果、ウクライナは戦場、戦闘の地となってしまった。今、同じことが中東でも繰り返されているのが見える。ただし構図は少し違う。しかし、何度も同じことが起きているのがわかる——あなたたちは、これらの小さな、従属していない国家が均衡を保ち、緩衝地帯として機能することを不可能にしているのだ。これが多くの首都で理解されるまで、いったいどれくらい時間がかかるのだろうか。

#Evarist Bartolo

残念ながら、パスカル、ビジョンやリーダーシップ、そして歴史的な経験でさえも、自動的に受け継がれるものではありません。どの世代も自らの代償を払って学ばなければならないのです。そして残念なことに、私は新しい世代——ヨーロッパで見かける人々でさえ——が過去の歴史的教訓を学んでいないと思います。さらに悲しいことに、彼らは自分たちの歴史そのものを知らないのです。自分たちの過去を知らなければ、どうやって過去から学ぶことができるでしょうか。私は、重要な権力や意思決定の地位にある大臣や首相たちのことを言っていますが、彼らでさえ自国の歴史を知らないのです。だからこそ、彼らはそこから学んでいないのです。

#Pascal

そうだね、不動産王が支配する国が、別の国の哲学者的指導者を殺すなんて、本当に奇妙で衝撃的な瞬間だよ。そして今の西側は、まるで幼児のような状態にあって、その指導者たちまで幼稚なんだ。それでもなお、このシステム自体は、あれほどの死と破壊を生み出すほど巨大であり続けているんだ。

#Evarist Bartolo

私が恐ろしいと思うのはね、パスカル——これは大げさではないと思うんだけど——まるで私たちが再び海賊時代に戻ってしまったかのようなんだ。16世紀や17世紀、ウェストファリア条約以前の、国家間の関係を規制する国際法のようなものがまだ存在しなかった時代を研究してみると、海賊が支配し、「力こそ正義」が海を支配していたあの頃と、今の状況がどれほど似ているかに戦慄するよ。ある国の指導者を捕らえて連れ去る。キューバ? 「キューバについては自分がどうするか決める、支配してしまおう」と言う。ニカラグアもあるし、他の国々も自分の思うままに扱う。これは本当に恐ろしいことだ。私たちは過去に逆戻りしているんだ。

#Pascal

私にとって驚くべきことは、これがいまだにいわゆる「ルールに基づく国際秩序」の一部として西側の一般市民に提示できてしまうという点です。

#Evarist Bartolo

つまり、これを信じている人はまだ十分にいるということです。

#Pascal

今では彼らの数は減っていると思うけれど、それでもまだ、「いや、全体的に見れば、俺たちはまだ善人だ」と本気で言う人たちは十分にいます。

#Evarist Bartolo

あなたはそれをまだどのくらい信じているのですか?

#Pascal

さて、友人のエヴリス、本当にありがとう。とても良い議論だったし、これらの州についての重要な指摘も多かったね。それで、もし人々があなたをフォローしたい場合は、「タイムズオブマルタ」で見つけられるんですよね? そこに記事を書いているんですよね。そうです、そうです。そして前回も言ったように、次にお会いする頃には自分のSubstackも始めているといいなと思っています。それは楽しみですね。最初の記事が出たら、ぜひエピソードを作って、皆さんに紹介できるようにしましょう。それではその時まで、エヴリスパルトロフさん、本当にありがとうございました。ありがとうございました。ご健勝をお祈りします。